

氏名・(本籍地)	内藤幹生(新潟県)
学位の種類	博士(文学)
学位記の番号	甲第84号
学位授与の日付	平成23年3月15日
学位論文題目	近世・近代移行期におけるキリシタン集落内部の変化
論文審査委員	主査 藤原聖子 副査 川勝賢亮 副査 宇高良哲

内藤幹生氏 学位請求論文審査報告書

「近世・近代移行期におけるキリシタン集落内部の変化」

論文の内容の要旨

本論文は、江戸時代末期から明治時代初期、とくに1873年のキリシタン禁教解除の前後で、長崎のキリシタン集落がどのように変化したかを分析したものである。禁教解除後には、キリシタン集落は、カトリックに入信する者と入信せずにキリシタンに止まる者に分裂した。信教の自由を得られた後でも、なぜあえて隠れキリシタンであることを選んだ信者がいたのか、また、当時の社会変動と、彼らの信仰表明はどのように関係していたのか、周囲の非キリシタン村民や為政者側のキリシタン像はどう変化したのか等を、当時の公的文書、宣教師の報告書をはじめとする記録文書から明らかにした。

第1章「近世期のキリシタン」では、その前提として、江戸時代の禁教施行後から幕末に至るまでのキリシタンと社会・国家の関係についてまとめた。1657年(明暦3年)の、肥前国大村藩でのキリシタン露頭事件を契機に、幕府・大村藩は禁制を強化し、それに大村藩諸村の村民も従った。キリシタンは表向きは幕藩体制に順応した模範的農民となり、またその信仰は習俗化した。潜伏により実態がつかみにくくなったために、幕府はキリシタンも隠し念仏のような異端的信仰集団も同様に、危険で奇怪な集団としてひと括りにしていた。

1790年(寛政2年)には浦上一番崩れ、1842年(天保13年)には浦上二番崩れ、1859年(安政6年)には浦上三番崩れというキリシタン露頭事件が発生した。これらの事件では、村落のキリシタン、非キリシタンは連帯し、内部にキリシタン(ないし異宗)が存在することを否定した。それは、告発によって村社会

が分裂し、生活に支障が出ることを村民が恐れたことによる。また、幕府側もキリシタン摘発を執拗に行うことにより、かえって幕藩制秩序が乱れると考え、過剰な衝突を避けた。

第2章「近世・近代移行期のキリシタン」では、1867年(慶応3年)に発する浦上四番崩れから、キリシタンと社会・国家の関係が大きく変化していく経緯を分析した。外国人宣教師との接触を経て、浦上村のキリシタンは信仰を積極的に表明するようになった。単に信仰を告白するだけでなく、村落よりもキリスト教への帰属意識を強く持つようになり、村落を越えたキリシタン・ネットワークを形成するとともに、村落内部の非キリシタン村民との相互扶助を拒否するようになった。このため、キリシタン村民と非キリシタン村民の間の確執が深刻化した。幕府・長崎奉行側もこれを危険視し、大規模な弾圧を行った。

第3章「近代初期のキリシタン」では、禁教解除後の変化を分析した。キリシタンは信教の自由は手にしたが、村社会の行事・共同作業を拒否するようになったため、地域では忌避される存在となった。キリシタンがカトリックに入信した場合も同様に、村落共同体の分裂をもたらした。さらに、ほとんどの住民がキリシタンであるキリシタン集落でも、カトリック入信者とキリシタンの間で対立が起こった。これは、江戸時代に定着したキリスト教邪教観が、キリシタン自身の間にも浸透していたためである。

以上のように、禁教解除前よりも後の方が、キリシタンが信仰を保持する上での障害が増えていった。そのパラドクスを長崎の個別村落の事例について解明し

たのが本研究である。

審査結果の要旨

本論文に関して、もっとも評価できる部分は、先行研究が少ない禁教解除以降のキリシタンの動向をとりあげ、社会情勢とキリシタンの信仰の両面から解明を試みたことである。なぜ解除後もカトリックにならずにキリシタンであり続けることを選択した人々がいたのかという点は、従来も関心を呼んだ問題だが、本論文はさらに、解除以前よりも以後の方がキリシタンの信仰は危機に晒されたというパラドクスを指摘したところが興味深い。

その中心的な問題を解明するために、ある程度広いスパンで明治初期以前のキリシタン史をまとめ、その過程で先行するキリシタン研究についても、歴史学・宗教学双方の分野にわたり、一定の理解をし、消化していることを示している。一次史料の読解に関しても、おおむね妥当であると判断した。

改善の余地があるのは、まず史料に関しては、公式文書が中心であり、そこから当該期のキリシタンの実態、とくに彼らの意識（信仰）がどこまでわかるのかという点には疑問が残る。博士課程在籍中に入手した限りの史料は有効に活用したとはいえるが、設定された問題を解明するにはそれ以上の史料が必要ではないかということである。また、一口に長崎といっても集落によって村民の構成も、経済・社会状況も異なるため、解禁以前と以後の比較をしたいのであれば、各集落についてその変化が見てとれるだけの史料が必要である。しかし、本論文は、生月島に関する史料は多いが、他の村落に関しては断片的なものもある。

方法論に関しては、本論文は信仰の変化と社会変化の間に因果関係があることを立証しようとしているが、どちらがどちらに影響しているのかという点に、十分な理論的裏付けがなく、筆者が場当たりに解釈しているように見えてしまうところがある。史料の解読を通して本論文が示唆していることは、比較文化研究上は、千年王国運動と比べるならば格段に意義が深まる。というのも、千年王国運動は、社会変化により経済的窮乏に陥った民衆が、ラディカルに現世の秩序を否定しようとするところから発生すると考えられてきたのだが、本論文が述べる限りでは、キリシタンはその反対に、経済的に追い詰められるという経験抜きに、現世の秩序を否定し、迫害を受けてでも信仰を貫き、来世での救いを志向し、その結果として村落共同体から排除され、生活に支障をきたしたためである。

このように、比較文化研究という視座からは、本論文には考察の価値がある発見が多々見受けられるが、それらには踏み込んでいないのはもどかしい。さらには、題目を「幕末から明治初期」ではなく「近世・近代移行期」と銘打ったのは、昨今の近代（モダニティ）論と接続させたいという意図があったためだが、この問題意識を本論文で展開することはできず、狭義のキリシタン研究の中に止まった。

以上のように、比較文化専攻の学位論文としては物足りない点も決して少なくはないが、いずれも今後の研究の進展により克服できないものではない。したがって、これらは今後の課題として、一層の研究の深化を期待し、本論文は学位授与に値するものと判断した。